

閉会の挨拶

玄田有史（東京大学社会科学研究所 助教授）

中村尚史（司会・東京大学社会科学研究所 助教授）

中村尚史… 最後にご挨拶ということで、玄田から一言。

玄田… あの、冒頭から「希望学に期待をするな」、「希望学はリスクで先が見えない」、「内部の者も不安だ」という率直な声で…新しい学問の船出を飾るのに大変、相応しい前向きな言葉を先輩方からたくさん貰いまして、ありがたく思っております。（笑）。

実は、吉本興業の相談役、横澤彪氏が新入社員へのスピーチで仰っていたのが印象的で、私が講演などさせていただく折にもよく引用させて貰うお話があります。どうやらこれが今、私たちの状況にぴったりのようです。

働くにせよ何をやるにせよ、生きていけば人は必ず壁にぶつかります。そこで遮二無二がんばれば壁を乗り越えられるかというと、現実はそうでもない。こんな時に大事なのは、壁にぶつかったらちゃんと壁の前でウロウロすること。前に向かって走りたいけど壁があつて走れないときは、その壁の前で悩みつつも足踏みをしていよう。そうするとある日突然、壁が勝手に崩れて前に進めたり、誰かがヘリコプターを飛ばしてくれて乗り越えられたりする、というのです。

案外、生きる真実や働く真実というのはそんなものではないでしょうか。「希望」が学問になるかということ自体も大きな問題ではありますが、まあ、壁にぶつかるまで、できるところまで全力でやってみましょう。挑戦してみれば、壁に突き当たってもそこでまた、実りある何かが見えてくると思います。

今日のシンポジウムのご感想を後ほど、アンケートでお書きいただけたら大変ありがたいのですが、いかがでしたでしょうか、案外楽しいものではないかもしれませんか？ 私たち研究者もそんなに眉間に皺を寄せて研究することばかりではなくて、何か楽しい部分もあればいい。そこから現実に役立ついろんなことが見えてくる、希望学がそんな学問になっていくといいなあ、と思っております。

それから再三に渡って皆さまにお願いしましたが、これからは私たち研究者だけが希望学を行うのではなく、色々な形で皆さんと一緒に考えたり、知ったり、壁の前で足踏みができればと願っております。本当は今日、皆さんとこの場で質疑応答など直接お話をしたかったのですが、こちらの会場が五時までに完全撤収して帰らねばなら

ないとのことで、時間の関係上、残念ながら致しかねました。せめてお渡しいたしましたアンケートで、様々なご意見をぜひお寄せ願います。

いずれにしても、今日が希望学、第一回のシンポジウムです。先ほどご紹介しましたが、今後は希望学サロンなど、いろいろな形で研究者以外の方々ともお話をする機会をつくっていく所存です。私たち研究所の「希望学プロジェクト」ホームページでは、今後行うことなどをお伝えしてまいりますし、ご意見などもどうぞこちらにお寄せください。

今日は短い時間ではありましたが、たくさんの方にお集まりいただきましてありがとうございます。このような催しの一番ありがたいことは、まさにお話をさせていただくことによつて、こちらが改めて何かを感じたり、発見することが多々あるということです。多分、今日こちらのステージに上がつてお話をさせていただいた一人ひとりも、改めて希望や希望学を考えることによつて、多くのアイデアやヒントを得たのではないかと思います。今日は本当に、お付き合いいただきましてありがとうございます。

中村尚.. これを持ちまして、希望学シンポジウムを終了させていただきます。